

地形と気象から歴史を探る。

新しい郷土の見え方とは

建設省(現・国土交通省)で長年、河川行政に関わり、地形と気象から日本史の謎に新たな光を当ててきた竹村公太郎さん。大阪で見つけた「本願寺跡」の碑、歌川広重の浮世絵など、独自の視点から紐解いた、日本の歴史についてお話を伺いました。

米国フーバーダムの遊び心を、「ダムギャラリー」に活かす

1945年生まれ私が育った時代は、日本のインフラがまだ復旧途中であり、よく停電や断水があったものです。日本はエネルギーに乏しい国と言われており、私は大学で土木を学んで「水力発電に携わる仕事がしたい」と考えるようになりました。

大学卒業後は建設省(現・国土交通省)に入り、鬼怒川の川治ダム、会津若松の大川ダム、神奈川県宮ヶ瀬ダムの現場を担当しました。3カ所目所长として担当した宮ヶ瀬ダムで思い出深いのは、日本で初めて「ダムギャラリー」という一般の人向けの見学施設を作ったことです。

きっかけは、出張で訪れたアメリカ・ラスベガス近郊にあるフーバーダムを見学したことでした。1938年

に完成した多目的ダムには、全景が見渡せるテラスが設けられています。ダム屋の私にとってみれば、「なぜそんな危ない場所に、ダムの機能とは関係ないものをわざわざ作ったのか」という疑問でいっぱいでした。

それをボランティアで案内をしてきたダム職員のOBに尋ねたところ、「国民を驚かせるためだ」という答えが返ってきたのです。巨額な税金を投じて作ったダムだから、国民にその全景を見せ、驚かせ、楽しんでもらおうとする。そのアメリカ人の遊び心に私は感動したのです。

そこで宮ヶ瀬ダムにも、一般の人を「遊ばせる」仕掛けを作りたいと考えました。しかし当時は、ダムの中に関係者以外の人間を入れるなど考えられない時代。「爆弾でも持ち込まれたらどうするのか」という心配も出てくるはずということで、私は部下たちに

「本省には黙っているように」と厳命しました。そして「大きなダムには調査・点検用に必要ですから」と上には報告しつつ、ダムの堤内に一般の人が通れるギャラリーやエレベーターをこっそり仕掛けておいたのです。

ダムが完成する頃には世の中が変わり、見学者を入れても良い状況になるはずだという確信がありました。その予感は見事に当たり、宮ヶ瀬ダムは2000年の完成以降、地域の観光スポットとして多くの皆さんに「遊んで」いただいているのは、提案者として嬉しい限りです。

本願寺派の強さの秘密は「信仰心より」「地形」だった？

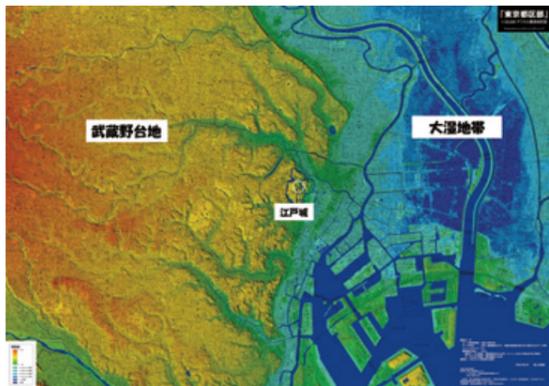
「地形と気象」という新しい視点から、日本の歴史を語れるのではと考え始めたのは、近畿地方建設局長として大阪に赴任した頃でした。あるとき大阪城の辺りを散歩していたら、本願寺跡という碑がありました。私は「本願寺といったら京都じゃないの」という程度の認識だったのですが、大阪出身の部下に「そこで信長と本願寺派が戦ったんですよ」と笑われてしまいました。

それを聞いて、私は「なるほど、あの『地形』だったから本願寺さんは11年も信長に抵抗できたのか」と合点がいききました。今も大阪城が立つ上町台地は

南北に約12kmに及ぶ丘陵地で、周囲は河内という地名も残るように河川に囲まれた湿地帯でした。その台地の上へ立てこもったら、信長でも攻め落とすのは容易ではない。これまでは「本願寺派の強い信仰心があったから」が定説でしたが、そうじゃない。信長はあの地形に苦戦したのだと気が付いたので。その後、本省に戻って河川局長を務めていた頃に建築関係の業界紙から「エッセイを書いてほしい」と依頼されたときに思い出したのが、この大阪のエピソードでした。河川行政に携わってきた私は、転勤で全国10カ所以上の土地に暮らしてきました。ダムなどの構造物を作るために、その地域の地形の特長を見極め、台風や大雨といった気象条件も知り尽くしていません。古文書や遺跡から歴史を語る人はたくさんいるけれど、地形と気象から歴史を語れる人間はそう多くはないのではないかと。そこで当初はペンネームを使い、56歳で退官してからは本名で、日本の歴史や文化、都市の成り立ちについて執筆活動をしたり、講演会でお話しする機会を持つようになりました。

広重の浮世絵は、「江戸の水を写す」「証拠写真」

私が江戸の治水について語るとき、その手がかりの一つにしているのが、



江戸城が湿地帯にあったことを示す標高地形図。

歌川広重の浮世絵です。特に晩年の傑作、「名所江戸百景」を、私は当時の江戸を知る貴重な「写真」だと考えているのです。

たとえば『虎の門外あふひ坂』では、一見すると裸で願掛けをする男2人や夜鳴き蕎麦の屋台が目がいまますが、背景には水がとうとうと落ちるダムと池が見えます。これは今も東京の地名に残る「溜池」で、確かにこの場所には飲料用の上水ダムとしての人工の湖があったのです。

今年の大河ドラマの主人公である徳川家康は、東は大湿地帯、西には雑木林が広がる不毛の地だった江戸を世界有数の大都市へと発展させました。そこで必要になったのが飲み水の確保です。関ヶ原の戦いの後、家康は

スペシャルインタビュー

Vol.23

竹村公太郎さん

特定非営利活動法人日本水フォーラム代表理事、博士(工学)



全国の諸大名に命じて江戸の大改革を進めました。たとえば和歌山藩の浅野家が手がけたのが、虎ノ門のえん堤の工事。近くの清水谷から流れ出す清浄な湧き水をえん堤に流し込み、これを溜めることで飲料水としても使えるようにしたのが、広重の絵にある「溜池」だったわけです。

このように地形や気象から、また地名や絵画など残された資料を通じて自分たちの住む場所について知ることとは、郷土を愛する心につながります。皆さんがお住まいの地域でも、先人たちが知恵を絞り、工夫を重ねた水にまつわるインフラがあると思いませんか。そうした場所に関心を寄せることで、郷土の歴史を新たな視点から見つめるきっかけにしたいだけだと願っています。

Kotaro Takemura

日本水フォーラム代表理事、博士(工学)。東北大学工学部土木工学科修士課程修了後、建設省(当時)に入省。ダム・河川事業を担当し、近畿地方建設局長、河川局長などを歴任。在任中から数々の論考を発表、土木工学の深い知識と実地経験に基づいて新たな歴史認識を仮説立て、歴史学者を唸らせる高い評価を受けている。『地形と水脈で読み解く! 新しい日本史』など著書多数。